

イラン南部の隊商町ロウニー遺跡について

山内和也*

1. はじめに

ロウニー (Rowni, もしくはロウハーニー Rowhani) 遺跡 (註1) はイラン南部のファールス州, ファッラーシュバンド (Farrashband) の東南約 30 km, ロウニー谷に位置する遺跡である (図1, 2, 5)。ファッラーシュバンド平原からペルシア湾にあったスィーラーフ (Siraf) に抜ける, 10世紀頃に繁栄した重要なキャラヴァンルート沿いに位置している。遺跡は現在のファッラーシュバンドからデフロム (Dehrom) を結ぶ幹線道路の北東側にあって, 北西から南東方向に細長く広がっている。ロウニー遺跡については1973年にドイツ考古学研究所のフフ (Huff, D.) によって調査が行われているが, 遺跡の北西部に残されている「チャハールターグ Chahartaq」建築遺構のみの調査であり (註2), この遺跡内に点在するその他の遺構群についての詳しい言及はなされていない (Huff 1975, 註3)。



図1 イラン全図

* シルクロード研究所研究員 (〒248-0002 神奈川県鎌倉市二階堂120-14)・国士舘大学イラク古代文化研究所共同研究員 (〒195-8550 東京都町田市広袴1-1-1)

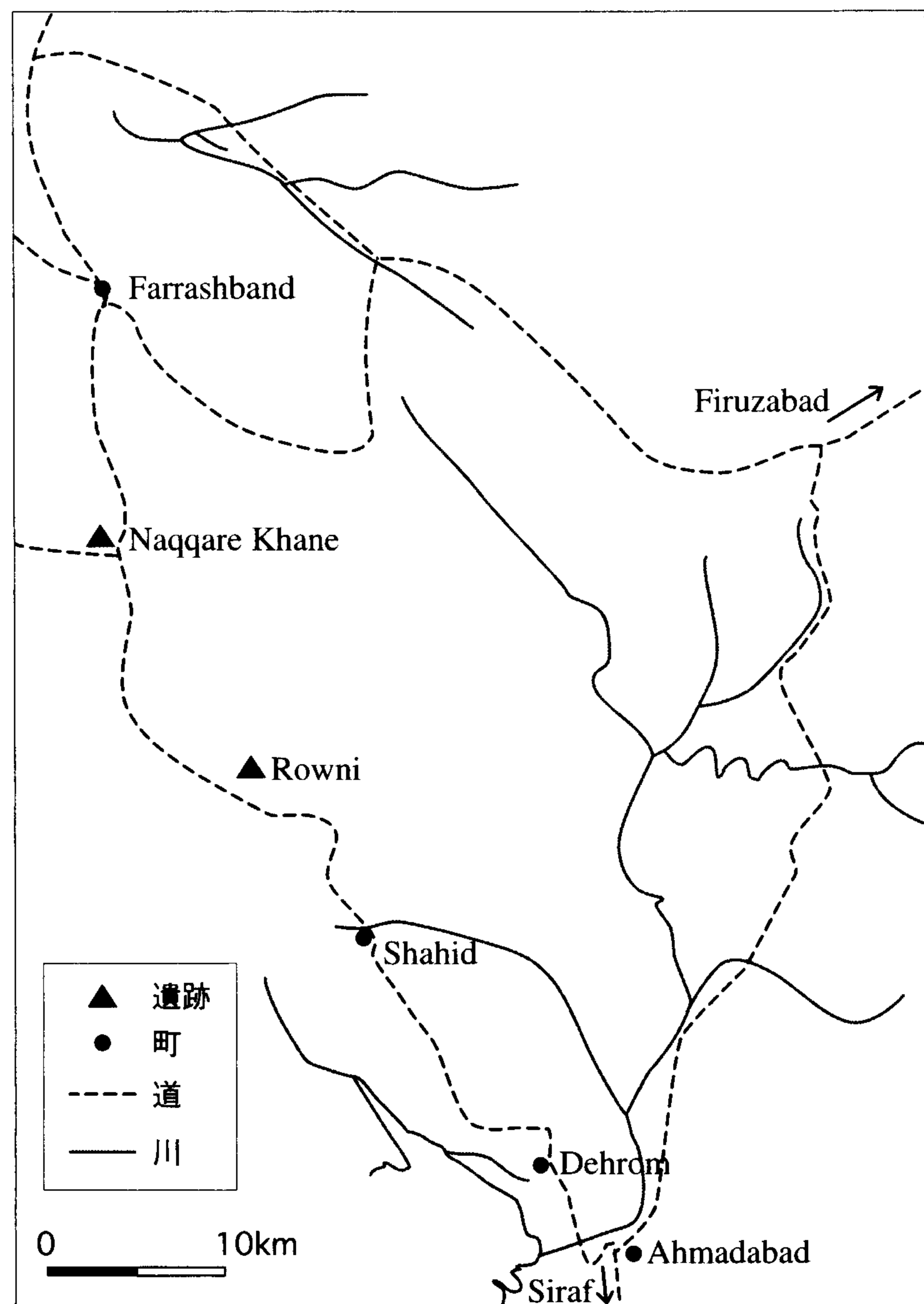


図2 ロウニー遺跡とその周辺（家島彦一氏作成の地図を基に作図）

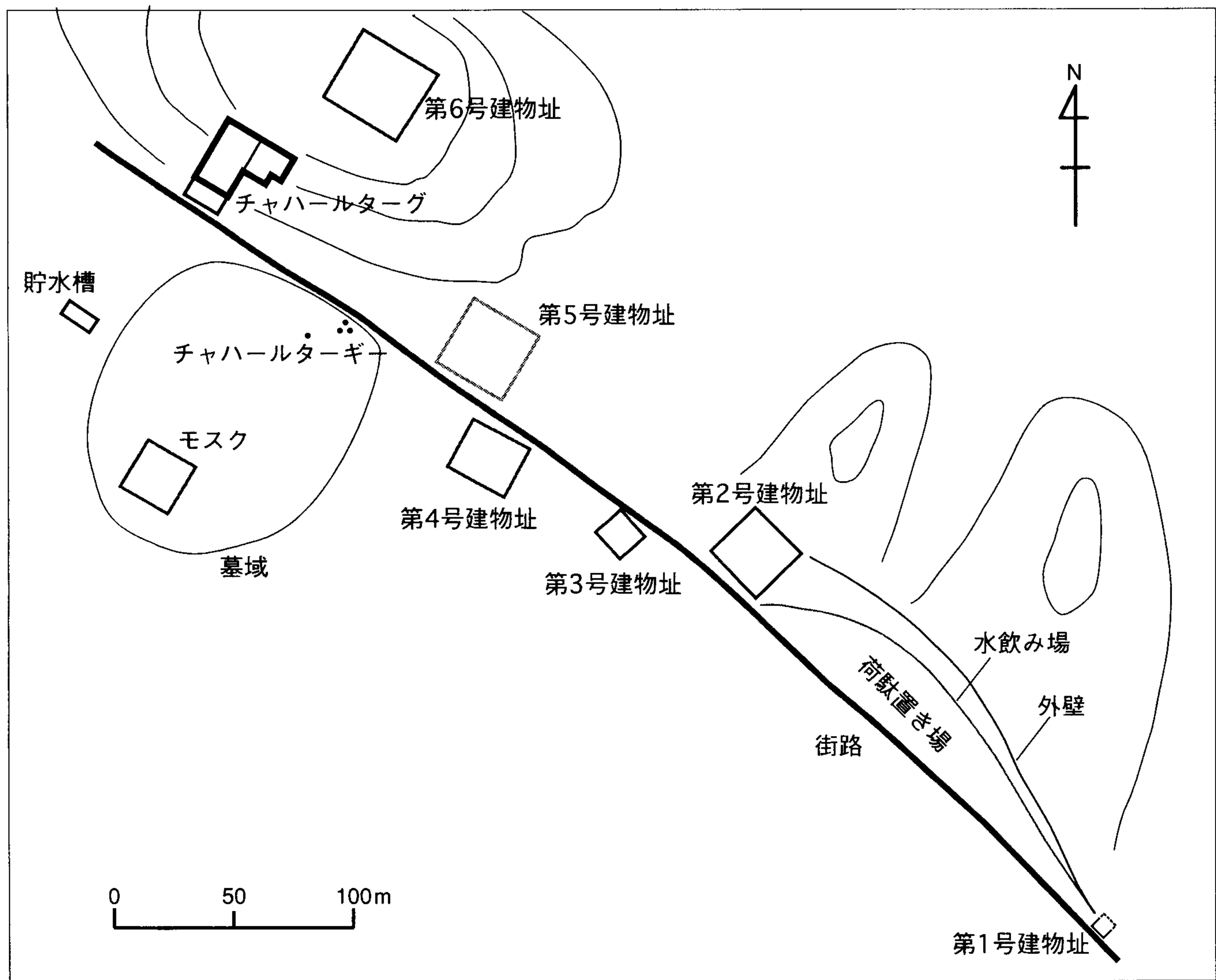


図3 遺構配置図

本稿は1999年1～2月にかけておこなわれたイラン南部のキャラヴァンルート調査の一環として行われたロウニー遺跡の踏査の成果に基づき、ロウニー遺跡の概要やその性格について述べていきたい（註4）。

2. ロウニー遺跡の概要

1973年、フフは遺跡の北西端に位置する小高い丘の上にある、いわゆる「エマームザーデ Emamzade（聖者廟）」とされるチャハールターグ建築遺構を調査し、その平面プランと断面図を発表し（図4）、あわせてチャハールターグの南西側にある貯水槽、および南側に広がる墓域について言及している（Huff 1975: 247）。フフはこの墓域の存在に基づいてチャハールターグを聖者廟とし、墓域に伴うものと考えた（註5）。

しかしながら、今回の踏査の結果、これ以外にもいくつかの遺構の痕跡が確認された（図3）。この遺跡に点在する遺構としては、上述のチャハールターグやいくつかの矩形の建物址、街路、荷駄置き場、貯水槽、モスク、墓などが挙げられるが、こうした遺構群は時期的および機能的な観点から大きく二つに分けることができる。

第1群に分類されるものは年代的に先行する遺構群で、遺跡の中央にある街路に密接に関連して配置されているチャハールターグ、関所やキャラヴァンサライと推定されるいくつかの矩形の建物址、荷駄置き場がこれに含まれる。これは、この遺跡がいうなれば「隊商町」としての機能を果たしていた時期に属するもので、隊商町を構成していた建物群と考えられる（註6）。

第2群に分類されるものは年代的にやや下ると推定されるもので、モスクや墓域、貯水槽がこれに含まれる。これはロウニー遺跡が「隊商町」としての機能を失った後に、この遺跡が聖者廟（チャハールターグ）とそれに付随する墓域として利用された時期に属するものである。

以下、この二つに分けて、それぞれの遺構について述べていくこととする。

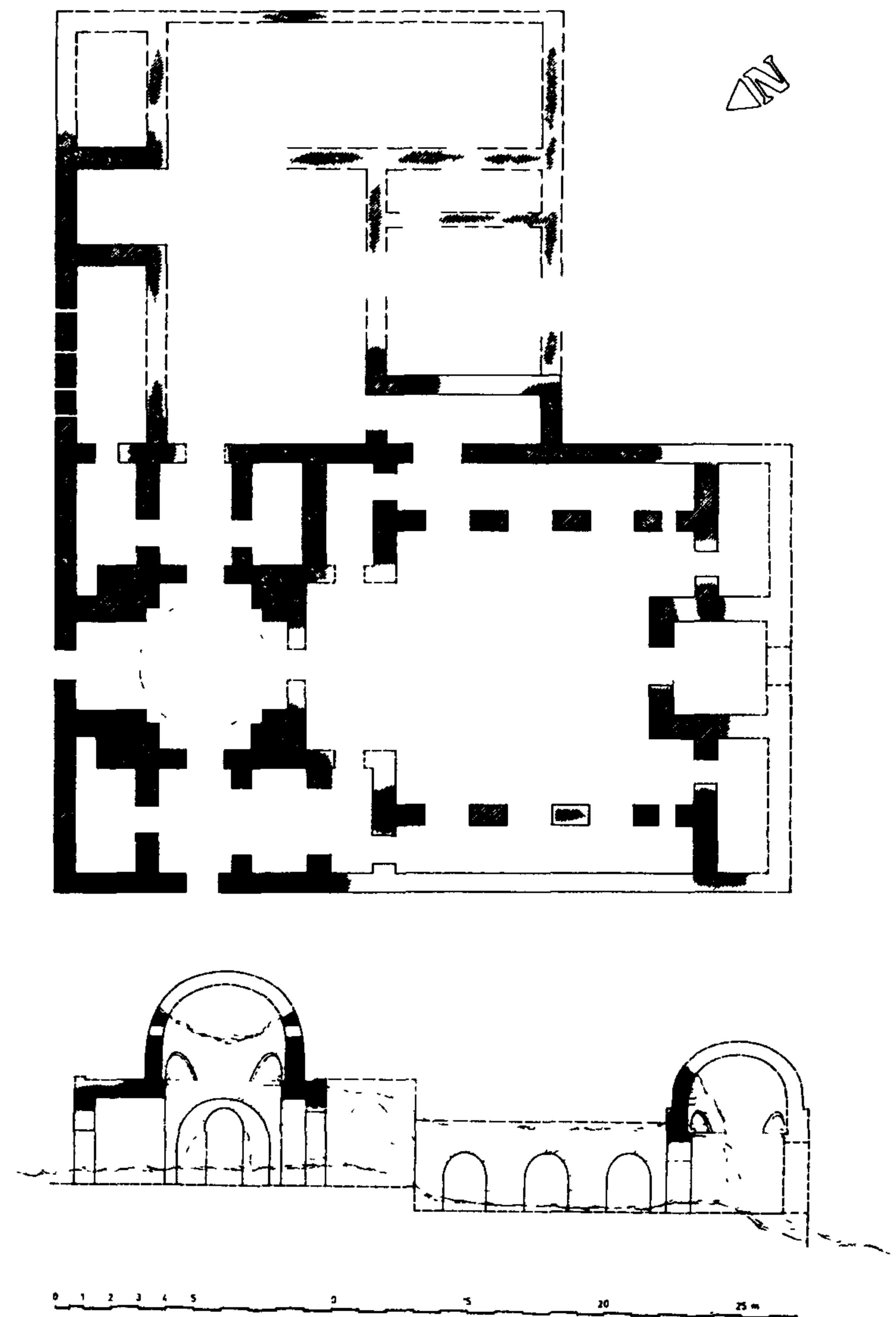


図4 チャハールターグ実測図（Huff 1975: Fig.10b）

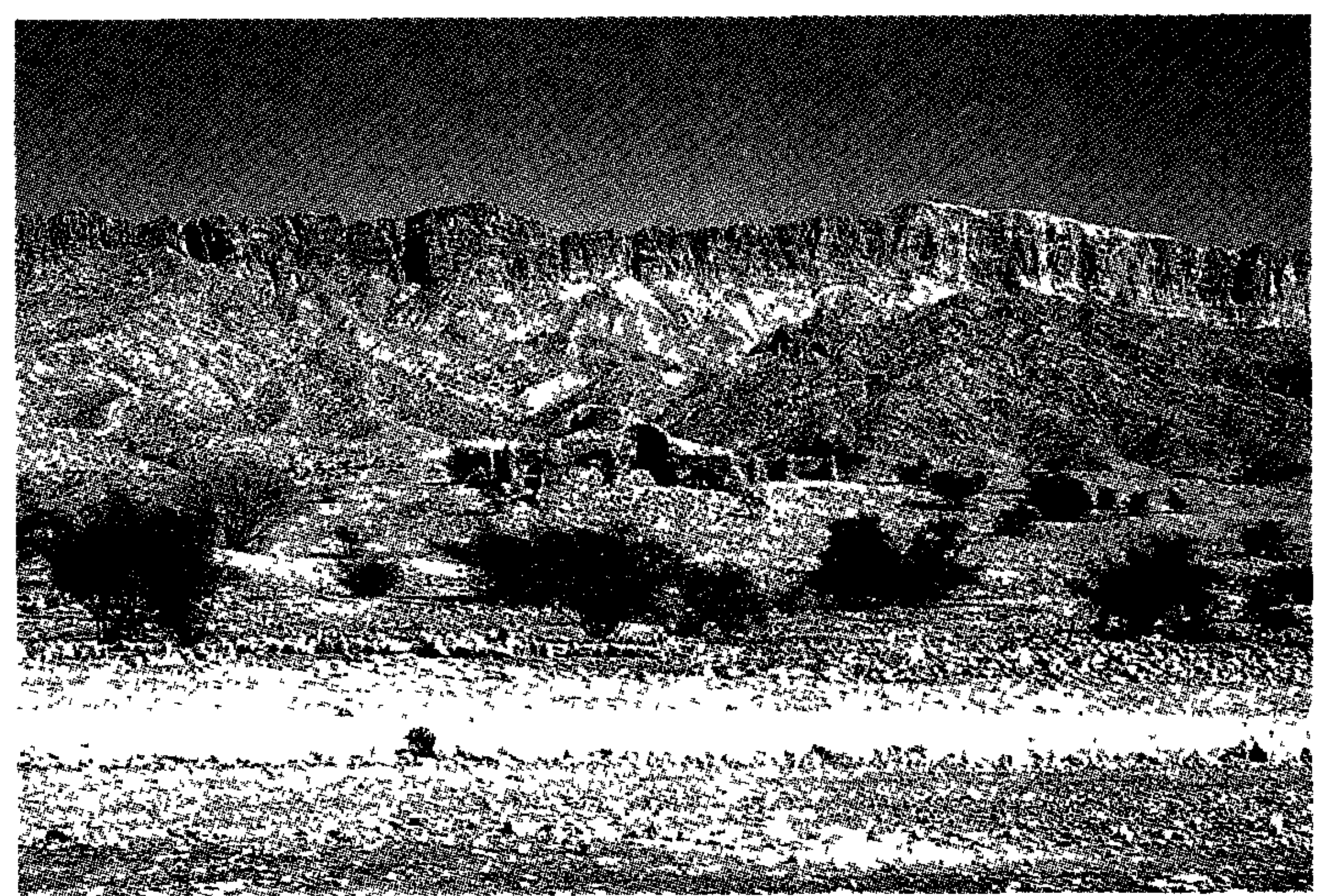


図5 遺跡遠景

(1) 第 1 群の遺構群

(a) 第 1 号建物址 (図 6)

遺跡の東南端に位置する矩形の小さな建物である。建物の基礎の一部しか残っていないために詳細は不明である。この建物が遺跡の東南端に位置すること、また、次に述べる街路がこの建物の地点から始まっていることからみて、この建物は関所もしくは町の入り口施設であったものと推測される。



図 6 第1号建物址

(b) 街路 (図 7 ~ 9)

幅 9~10 m の街路で、中央部分がやや凹んでいる。確認された分で全長約 500 m、南東から北東方向に、第 1 号建物址のある遺跡の東南端からチャハールターグのある北西端まで続いている (註 7)。両側には幅 60~70 cm の石積みの壁がある。この壁は両端にやや大きめの割り石を並べ、その間に石を詰めて構築されている。この街路の両側に沿っていくつかの矩形の建物と荷駄置き場が位置している。



図 7 街路



図 8 街路



図 9 街路の壁

(c) 荷駄置き場 (図10, 11)

街路の北東側、遺跡の東南部に位置する場所がこれにあたり、街路の壁と外壁で囲まれた空間である。外壁は北東側にやや湾曲して張り出しながら、第1号建物址からキャラヴァンサライと推定される第2号建物址まで続いている。街路の壁と外壁の間、外壁に沿うように家畜の水飲み場と推定される水路遺構がある。水路遺構は幅約40 cmで、両端に割り石を一行に並べ、その間を水が流れるようになっている。この水路遺構は斜面の等高線に沿うように湾曲しているが、これは水が一ヶ所に溜まらないように工夫されているものと考えられる。溝状に作られている家畜の水飲み場の類例は現在の遊牧民の間でも確認されること(図27)、また、この部分で耕作が行われたと考えにくいことから、この水路は耕地用の用水路ではなく、家畜用の水飲み場とするのが妥当である。また、街路の壁と外壁の間には他の遺構の痕跡が確認されていないことから、この部分を「荷駄置き場」と推定した。ここにはキャラヴァンに用いられていたラバやラクダといった荷駄が入れられていたものと考えられる。



図10 荷駄置き場



図11 水飲み場 (水路遺構)

(d) 方形・矩形の建物 (図12~14)

街路に沿って4つの方形の建物址(第2, 3, 4, 5号建物址)の壁の基礎が確認された。大きさは異なるが、ともに壁厚は70~80 cmで、両端にやや大きめの石を2列に並べ、その間に石を詰めて構築されている。上部が残っていないためモルタルが使用されていたかは不明である。

この中でも注目されるのは第2号建物址である。全体は方形(大きさ28×28 m)であるが、中庭を中心としてその周囲に部屋が作られる、いわゆるイラン南部に見られる典型的なキャラヴァンサライの平面プランをもってい



図12 第2号建物址



図13 第2号建物址 (内壁)

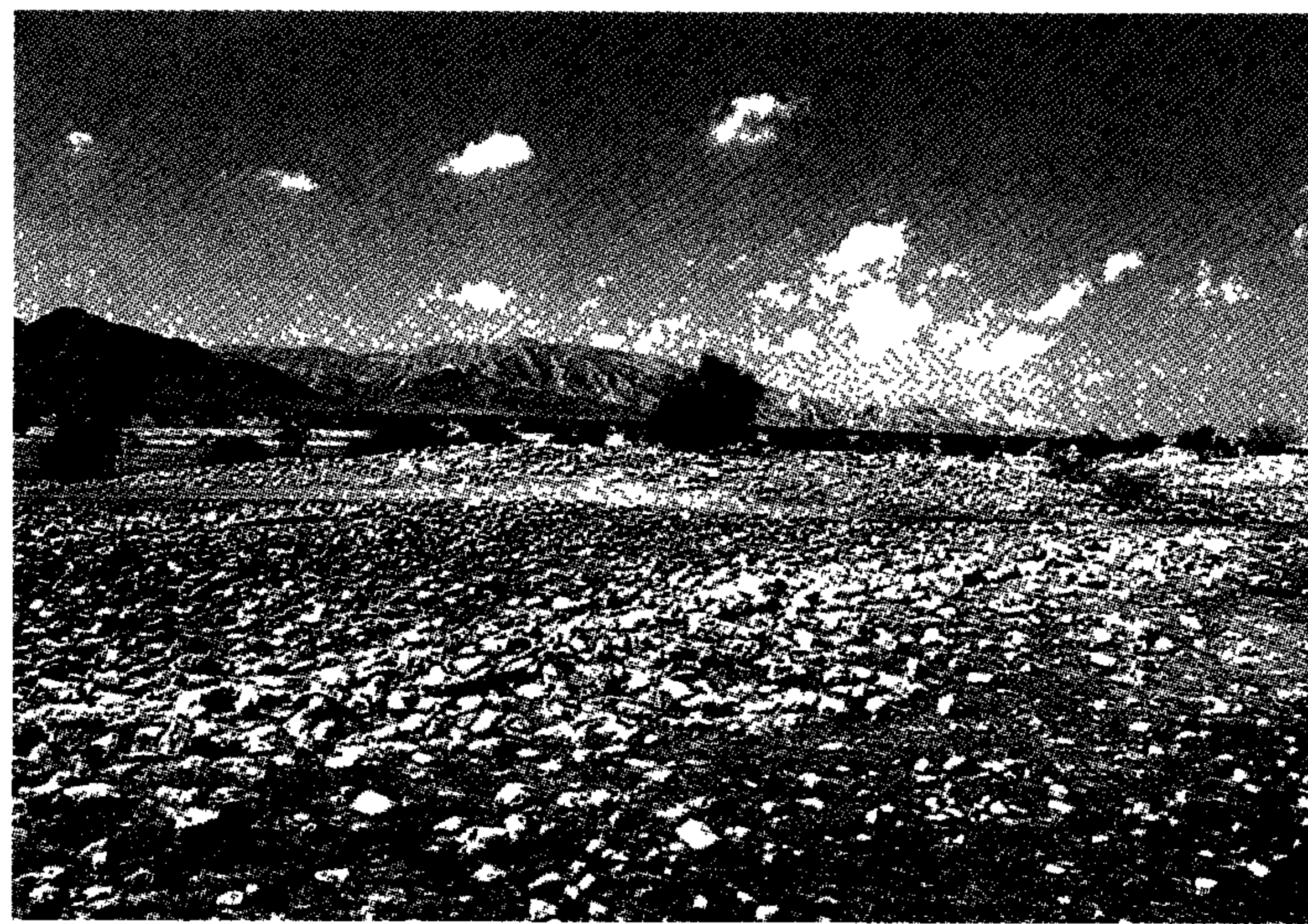


図14 第4号建物址

る (Vanden Berghe 1961: 168)。入り口は街路に面した南西側にある。

その他の建物址も同じように平面プランは方形もしくは矩形であるが、第2号建物址のようにキャラヴァンサライと推定されるプランとは異なっている。現時点ではこれらの建物址の機能については明らかではないが、税関や物品の保管所などの施設とすることが可能である (註8)。

(e) チャハールターグ (図4, 15~20)

チャハールターグは遺跡の北西端のやや小高い丘の南側斜面に位置する。大きさは南北約 27 m, 東西約 27 m で、東側に出っ張りがある「く」の字形の平面プランをもっている。しかしながら、外壁の構築状況からみて、当



図15 チャハールターグ, 貯水槽



図16 チャハールターグ (東南より)



図17 チャハールターグ (入り口部分)

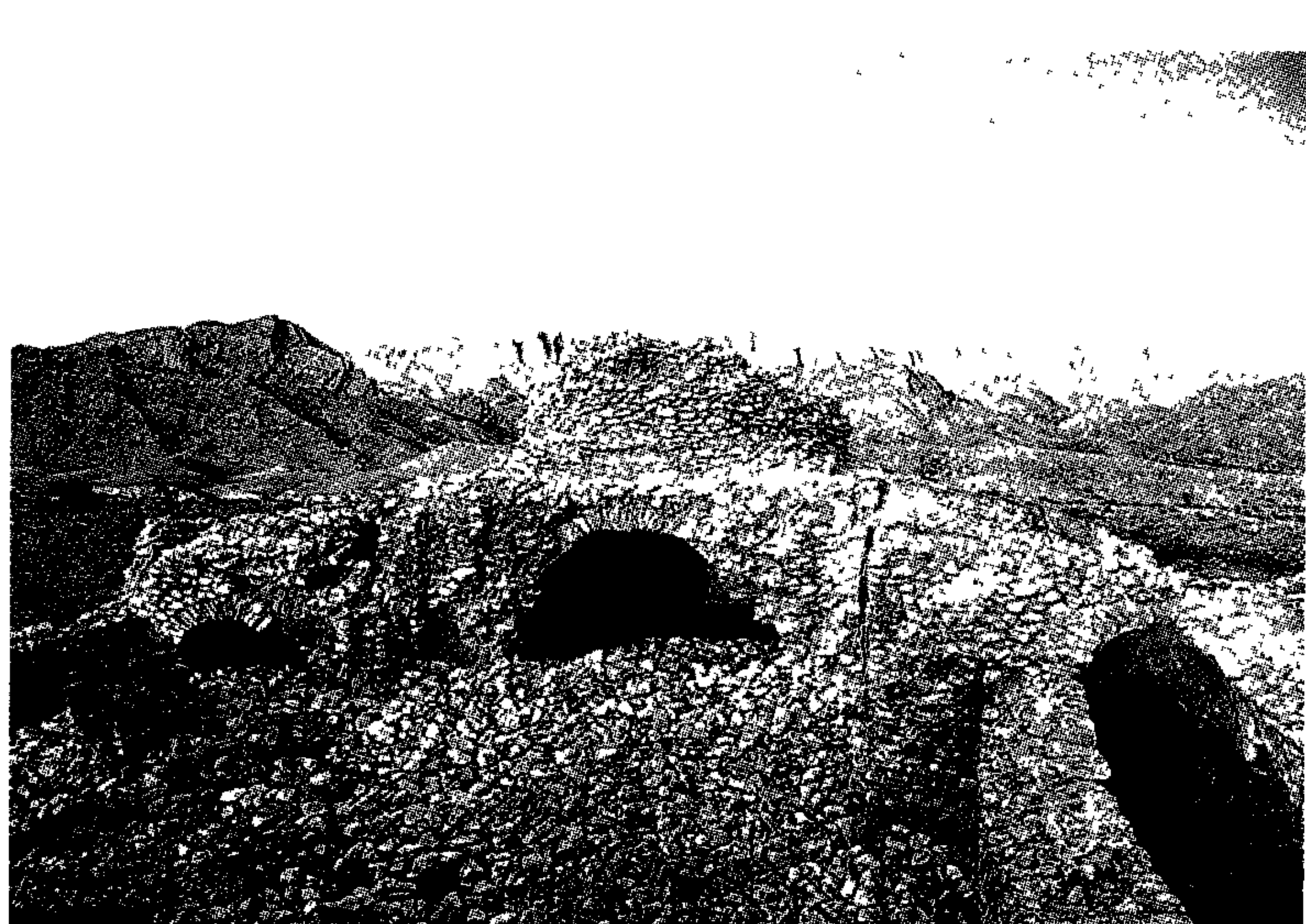


図18 チャハールターグ (中庭と入り口)



図19 チャハールターグ（北東より）



図20 チャハールターグ（側廊）

初は南北に長い矩形のプラン（ 27×16 m）であり，後になって東側部分が付け加えられたものと考えられる。壁はすべて割り石と石膏もしくは石灰モルタルで構築されており，壁厚は70～80 cmである。建物の前面，つまり街路側には石積みの階段が一部残されている。

建物全体は斜面に沿って2段の階段状に構築されている。北側部分ではチャハールターグを中心として両翼にいくつかの小部屋が配置されている。チャハールターグの前面，つまり南側には中庭があり，その両側には側廊が作られている。入り口は南端にあり，ドーム屋根で覆われている小部屋となっている。東側の増築部分はやや大きめの部屋で構成されているのが特徴である。

このチャハールターグを核とする建築コンプレックスの機能については後述を参照されたい。

(f) 第6号建物址

チャハールターグの北東側，丘の上の平坦面に位置する建物址である。大きさは 37×35 mで，比較的大きな建物である。北東側と北西側の一部の壁の基礎はすでに失われているが，大きな中庭とそれに沿って内側に部屋が構築されていたものと思われる。現時点ではこの建物が何に用いられたかは不明である。

(2) 第2群の遺構群

(a) 墓域（図21，22）

チャハールターグの南側に位置しており，遊牧民の墓域として利用されている。墓の形態は土壙墓で，割り石を縦に差し込んで矩形の墓としたものや，その回りを割り石で丸く囲んだものが多く見られる。墓石に残された墓誌銘の中には日付が刻まれたものがあり，それによれば14世紀初頭のものであることが明らかである（註9）。

また，墓域の中には大きさ 4×4 mの4つの矩形の建物址が存在する。崩落が著しくその原型を復元することは難しいが，現在，イラン南部でチャハールターギー（Cahartaqi）と呼ばれている小型のチャハールターグに類似するものであると推測される。これは現在，墓域の傍らに構築されているもので，聖者廟として利用されている例もみられる（図28）。これから類推すれば，これは墓域に伴うものであると理解される。

これらの墓の構築に用いられた割り石は，隊商町を構成していた建物や街路の石積みの割り石が用いられていると考えられること，また，14世紀の日付を伴う墓誌銘が確認されていることから，この墓域が隊商町と同時代に発達したのではなく，時期的に後代のものであると推定できる。



図21 墓域およびチャハールターギー



図22 チャハールターギーおよび墓

(b) モスク (図23, 24)

大きさ約 10×10 m の方形のモスクで、南西方向にミフラーブがあり、入り口はその反対側の北東側にある。割り石と土を多く含む石膏もしくは石灰モルタルで構築されており、チャハールターグと比較すると作りが粗雑であることから、チャハールターグと同時代のものというより、より新しいものである可能性が指摘できる。

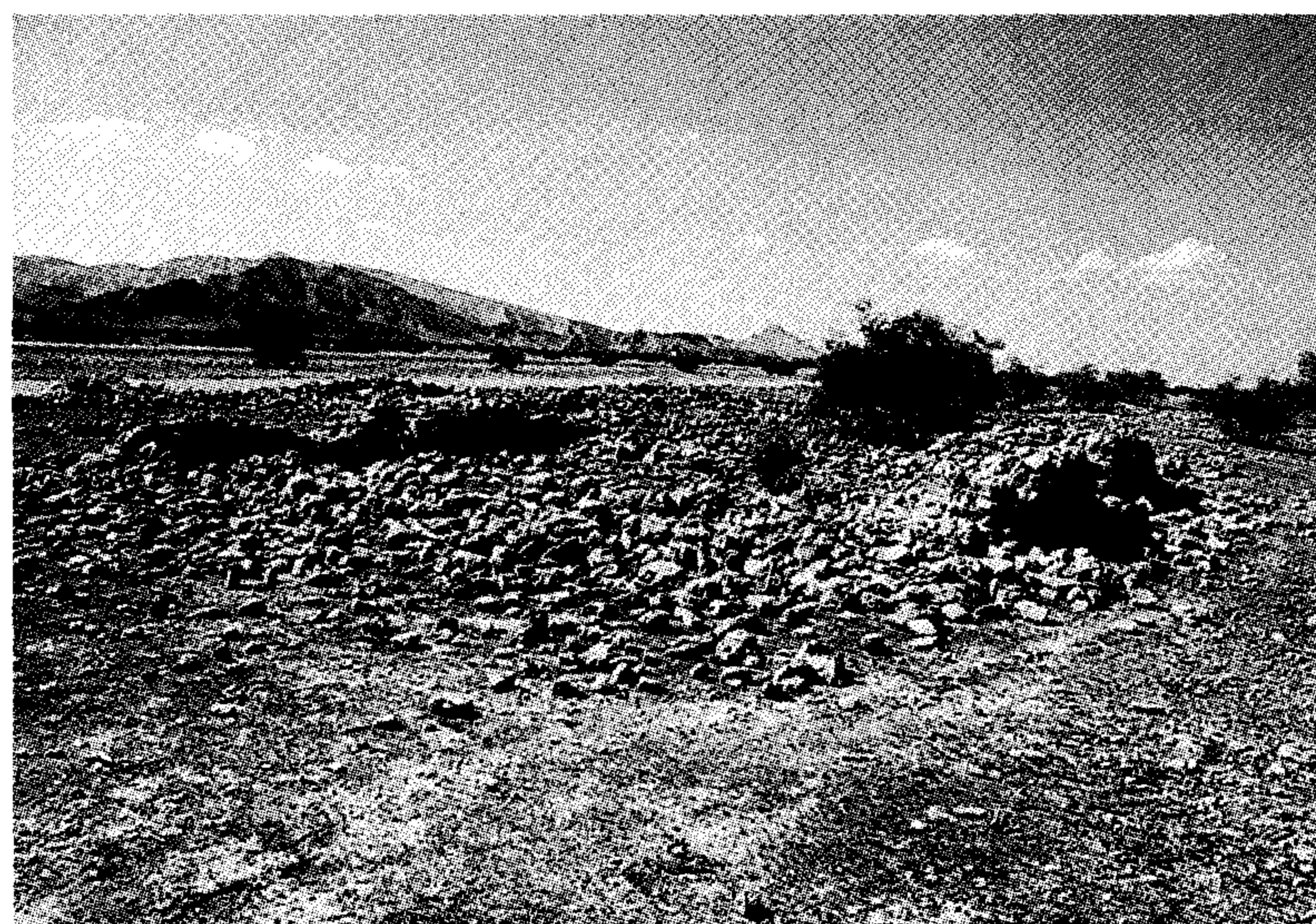


図23 モスク (北東より)



図24 モスク (ミフラーブ)

(c) 貯水槽 (図15, 25, 26)

外壁の平面プランは矩形であるが、内側は四隅が隅丸になっている。大きさは 15×6 m である。現在は崩落し



図25 貯水槽



図26 貯水槽 (取水口)



図27 家畜の水飲み場（ボズパル Bozpar）



図28 チャハールターギー（アフマダーバード Ahmadabad）

ているがヴォールト式天井で覆われていたものと考えられる。割り石と石膏もしくは石灰モルタルで構築されており、内面には漆喰の上塗りの痕跡がある。イラン南部のキャラヴァンサライに附属している他の貯水槽と同型のものである。地表面のレベルには壁に取水口がある。

この貯水槽が隊商町と同時に構築されたものか、それとも隊商町の衰退後になって構築されたものなのか、この遺構の年代を特定することは難しいが、ここでは第2群の遺構群として分類した。

(3) ロウニー遺跡の年代

フフは建築プランおよび墓域の存在に基づいてチャハールターグの年代をイスラム時代以降と推測しているが(Huff 1975: 247)、現時点では年代を明らかにする証左に乏しいといえる。しかしながら、このファッラーシュバンドからスィーラーフへ抜けるキャラヴァンルートは11世紀頃には次第に衰退していったと考えられることから(註10)、ロウニー遺跡の第1群の遺構群、つまりチャハールターグを含む隊商町は10～11世紀頃に、第2群の遺構群は11世紀以降に年代付けられるものと考えられる。

(4) チャハールターグの機能

ここで、隊商町であるロウニー遺跡においてチャハールターグを核とする建築コンプレックスがどのような機能を果たしていたかという点について簡単に検討してみることとする。

まず第一に指摘できる点は、チャハールターグは従来考えられていたように孤立して存在するものではなく、隊商町を構成する一つの建物として存在しているという点である。チャハールターグが隊商町を構成する一つの建物となっている例としては、今回踏査を行った同じファールス地方のナッガーレ・ハーネ遺跡やガナーテ・バグ（Qanat-e Bagh）遺跡、ジェッレ（Jerre）遺跡が挙げられる。これらの遺跡もロウニー遺跡と同様に、サーサーン朝時代からイスラム時代初期にかけてのキャラヴァンルート沿いに位置するいわゆる「隊商町」の遺跡であり、チャハールターグは隊商町を構成する一つの施設であることが確認されている。

次に、こうした前提の上で、ロウニー遺跡のチャハールターグがどういう機能を果たしていたかという点であるが、これは大きく分けて宗教的な施設と行政に関する施設の2つの可能性がある。行政に関連する施設であれば、隊商町を監督する役所とできよう。また、宗教的施設とすれば、拝火神殿、モスク、聖者廟といった可能性もあるが、単なるキャラヴァンルート沿いの「旅の安全を祈願する祠」とすることも可能である。

いずれにしろ現段階ではそれを明らかにする根拠に乏しいため、ここではいくつかの可能性を提示するのにとどめ、詳しい検討については別稿に譲りたい。

(5) 小 結

上述のようにロウニー遺跡の遺構群は大きく二つに分けることが可能で、この二つの遺構群は時代的にも機能的にも異なっていることが明らかとなった。

ロウニー遺跡の第1群の遺構群は、明らかに隊商町としてのコンプレックスと認めることが可能である。ロウニー遺跡は、ファッラーシュバンド平原からペルシア湾岸に位置するスィーラーフへ抜ける重要なキャラヴァンルートに沿って点在していた隊商町の一つであり、宗教的施設もしくは行政関係施設であるチャハールターグ、関所、税関、キャラヴァンサライ、街路などの施設を有していた。また、これらの隊商町が機能していたのは10～11世紀頃と考えられる。

第2群の遺構群については、おそらくキャラヴァンルートの変更に伴ってロウニー遺跡が隊商町としての機能を失った後、遊牧民たちによってチャハールターグが聖者廟として利用され、その前面が墓域として用いられた時期のものと推定され、11世紀以降現在に至るまで機能しているものと考えられる。

3. おわりに

イラン南部のサーサーン朝時代からイスラーム時代のキャラヴァンルート沿いには数多くのチャハールターグやキャラヴァンサライが残されているが、これまでは建物址そのものの研究が主流で、その周辺に存在するその他の遺構にはあまり注意が払われてこなかった。そのためチャハールターグの機能についても解明の糸口がなかなか見いだせなかった。

今後は広い範囲で遺跡全体を視野に入れて調査を行っていくことにより、隊商町のあり方、そしてチャハールターグを含む個々の遺構の機能やその年代について解明していくことが必要であると思料される。

註

- 1) 上岡弘二氏によれば、「rowni」は「rowhani（神聖な）」が訛ったものと推測される。
 - 2) 「チャハールターグ」の字義は「4つのアーチ」であり、イラン南部で数多く確認されている遺構である。その特徴としては、4つの脚柱（ピア）とそれにつけられるアーチもしくはヴォールト、中央の正方形の空間の四隅に作られるスキンチ（追持入隅）、十字形をなす平面プラン、割石と石膏・石灰モルタルの建築材といった点が挙げられる。現存する多くのチャハールターグ建築遺構（以下、チャハールターグ）は小高い丘に孤立して存在しており、四方に向かってアーチが開いており、周囲から内部が見えようになっている開放式の建物であるかのような印象を与えてきた。しかしながら、フフ（Huff 1975, 1995）やクライスの調査（Kleiss 1991, 1993）および今次の踏査によれば、本来はこのチャハールターグは孤立したものではなく、その周囲にヴォールト式天井をもった回廊が巡っており、外から内部が容易に見える構造ではなかったことが判明している。現存する多くのチャハールターグは比較的堅固に構築されたチャハールターグ構造の部分のみが残っているため、見かけ上、開放式の建物のように感じられているにすぎない。
- また、以前はチャハールターグはゾロアスター教の拝火神殿と理解される傾向が強かったが（Vanden Berghe 1961, Godard 1938 etc.）、宗教的建築物のみならず、ガスレ・シーリーン（Qasle Shirin）やフィールーザーバード（Firuzabad）といった宮殿などの他のいろいろな建物にも用いられていることから、必ずしもすべてが拝火神殿であるとはいえない。また同様に、これまではサーサーン朝ペルシア時代の特徴的な建物であるかのように扱われてきたが、イスラーム時代に入ってからチャハールターグが多用されていたというのが一般的である（Huff 1990）。

それゆえ、本稿では「チャハールターグ」という用語をチャハールターグ構造を持った建築物を核とした建築コンプレックスを指すものとして用いることとする。

- 3) フフはこの遺跡の名称を「ロハーニ rohani」と報告している。
- 4) この調査は東京外国語大学の家島彦一教授を代表者とする「イスラム圏における交通システムの歴史的変容に関する総合的研究」の一環として、1999年1～2月にかけておこなわれたもので、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所家島彦一教授、上岡弘二教授（当時）、山内和也、西山伸一（ロンドン大学博士課程）の4名が参加した。
- 5) フフは建築プランおよびそれに付随するとみなした墓域の存在に基づいてチャハールターグ遺構をイスラーム時代初期に建設された「エマームザーデ（聖者廟）」と推測しているが（Huff 1975: 247）、これは遺跡全体の成立の過程をみると、むしろ時系列的には逆と考えるのが妥当である。つまり、はじめから聖者廟となるチャハールターグが建設され、それと同時に墓域が形成されていったのではなく、もともと隊商町の一つの建物としてのチャハールターグが存在しており、隊商町としてのロウニー遺跡の機能が失われた後、放棄されたチャハールターグの近くに次第に墓域が形成されていったのに伴い、チャハールターグ自体が聖者廟として認識されるようになったものと推測されよう。
- 6) 「隊商町」という名称については、パルミラやドゥラ・エウロポスのような大規模な「隊商都市」との対比の上で用いた便宜的なもので、この用語が適当かどうかについては今後の検討を要する。
- 7) 街路とチャハールターグおよびその他の建物の配置には興味深い点がある。それはチャハールターグの北西側では街路の痕跡が確認されていない点である。これはファッラーシュバンド平原の南端、ロウニー遺跡の北西約 15 km に位置するナッガーレ・ハーネ（Naqqare Khane）遺跡でも同じ状況が確認されている。ファッラーシュバンド平原からペルシア湾岸に抜けるキャラヴァンルートの拠点であったナッガーレ・ハーネ遺跡では、遺跡の南端にチャハールターグが位置しているが、街路を含む街址は遺跡の北側つまりファッラーシュバンド平原側に広がっており、チャハールターグの南側には街路が確認されていない。チャハールターグは小高い丘の上に建てられるという地形的な条件はあるものの、こうした状況をみると、キャラヴァンの向かう方向と何らかの関係があるのかもしれない。
- 8) 家島彦一氏から、海の港湾都市との比較から、こうした建物は税関や物品の保管所などの施設である可能性があるとのご指摘を頂いた。
- 9) 家島彦一氏のご教授による。
- 10) このキャラヴァンルートの年代については家島彦一氏よりご教授頂いた。

引用文献

家島彦一・上岡弘二

1988 『イラン・ザグロス山脈越えのキャラバン・ルート』、東京大学外国語学部アジア・アフリカ言語文化研究所、東京。

Godard, André

1938 “Les Monuments du Feu”, *Athār-e Īrān* III. I (1938), pp. 7–80.

Huff, Dietrich

1975 “Sasanian Čāhār Tāqs in Fars”, Bagherzadeh, Firouz ed., *Proceedings of the IIIrd Annual Symposium on Archaeological Research in Iran, 2nd – 7th November 1974*, Tehran.

1990 “Čahārṭāq”, *Encyclopaedia Iranica* vol. IV, pp. 634–638.

1995 “Beobachtungen zum Čahartaq und zur Topographie von Girre”, *Iranica Antiqua* XXX (1995), pp. 71–92.

Kleiss, Wolfram

1991 “Scloss Aliabad bei Furk in Fars”, *AMI* 24 (1991), pp. 261–268.

1993 “Zentralbauten aus vorislamischer und aus islamischer Zeit in Zentral- und Sudiran”, *AMI* 26 (1993), pp. 191–225.

Vanden Berghe, L.

1961 “Récents découvertes de monumentssasanides dans le Fārs”, *Iranica Antiqua* I (1961), pp. 161–198.